

令和7年度第2回 東京都北区いのち支えるセーフティネット協議会 議事要旨	
日 時	令和8年1月15日(木) 午後2時～午後3時27分
場 所	北とぴあ 15階 ペガサスホール
出席者	<p>■委員出席者(委員21名うち代理出席4名)</p> <p>竹島 正 委員長 碓井 亘 副委員長 明 英彦 委員 上田 文子 委員 大橋 委員(佐川 慎一郎 委員代理) 尾崎 委員(石井 綾華 委員代理) 岡村 聡 委員 奥西 史郎 委員 河奈 正道 委員 佐藤 真理子 委員 佐藤 修 委員(榎鶴 篤 委員代理) 関口 久子 委員 田代 吏 委員 千葉 清貴 委員(阿部 伊織 委員代理) 西村 由紀 委員 畠中 俊明 委員 原田 英孝 委員 鮎田 栄治 委員 三宅 康史 委員 山内 貴史 委員 吉田 睦子 委員</p> <p>■欠席者(2名)</p> <p>小池 一博 委員 名取 秀康 委員</p>
議 題	<p>1 令和7年度自殺予防対策事業実施報告</p> <p>2 「救急医療と自殺企図者支援」 三宅 康史 委員(一般社団法人 臨床教育開発推進機構)</p> <p>3 その他</p>
配付資料	<ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度第2回東京都北区いのち支えるセーフティネット協議会 ・救急医療と自殺企図者支援 ・自傷・自殺未遂レジストリ 2025 (参考資料)

	<ul style="list-style-type: none"> ・北区いのち支えるセーフティネット協議会 委員名簿 ・令和7年度北区いのち支えるセーフティネット協議会理事者及び事務局一覧 ・席次表 ・ゲートキーパー手帳（令和7年版） ・「心のサインに気づいてください」リーフレット（令和7年版）
要 旨	
開 会	<ul style="list-style-type: none"> ・健康部長挨拶 ・事務局から新委員等の紹介、配付資料の確認
議題 1	・事務局から、資料に基づき、説明後、質疑
議題 2	・三宅委員から、資料に基づき、説明後、質疑
議題 3	・その他、意見交換
説明及び 質疑等	<p>議題 1 令和7年度自殺予防対策事業実施報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・職員向け研修では、新任者や係長候補者を対象に研修を実施し、さらに主任職員向けの養成研修では、東京自殺防止センターから講師を迎え、ロールプレイや情報共有を通じて実践的な学びを深めた。一方、区民向けでは自殺対策を広く知ってもらうことを目的に 8 月にゲートキーパー研修を開催し、1 月には地域福祉課の声がかけて民生児童委員などを対象とした養成講座を行い、理解促進を図る。 ・ゲートキーパー研修についての説明 <p>本講座では、支援職や一般区民、幅広い世代にゲートキーパーの役割「気づく、声をかける、話を聞く、専門家につなぐ、見守る」を学ぶ機会を提供した。アンケート結果から学びを深めたい声が寄せられ、LINE オープンチャットを活用したフォロー体制も好評だった。区民が自殺対策に重要な役割を果たしていると改めて実感し、今後も継続的な講座実施に取り組む考えである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本講座では、参加者数の課題があったが、その後オンラインでの対応も話題に上がり、幅広く知識を深めていただく機会を提供した。基本的な知識に加え、実際の事例を交えながら、現場で起こる具体的な状況や理解のポイントについて話した。また、医学的な視点やさまざまなタイプの自殺についても触れ、イメージがわきやすい内容を目指した。 ・来年度の協議会では、第 1 回目で子どもに関する課題、第 2 回目で地域や働く世代に関する課題について議論し、課題抽出を進める予定である。この成果を基に「北区版自殺対策計画（第三次）」を令和 10 年度に策定し、令和 11 年度の施行を目指す。委員の皆様からの意見を積極的に取り入れながら進めていく。 ・協議会をオンライン化し、頻回の意見交換や事例共有を行える場を設けるべきだと考える。テーマごとにまとめた Web 形式の開催を提

案する。

議題2「救急医療と自殺企図者支援」

・救命救急医療において取り組むべき課題は、自殺企図者やその遺族に対するケアである。心身の対応を重視し、再企図リスクを軽減する支援体制を整える必要がある。また、研修会や他の学術団体との連携を通じて、専門的な知識の普及と質の高い自殺対策を推進していく。

・北欧や欧米では既に自殺未遂者を含む登録制度が実施されており、日本でも2022年12月から同様の取り組みが始まった。現在約100施設の救命救急センターでデータ登録が進み、登録症例対象者数は増加傾向にある。自殺未遂レジストリー（JA-RSA）の報告書が公開されており、データから若年層、特に20代女性のオーバードーズが多いことが判明しており、思春期の自殺企図については小児医療の施設とも連携を進めている。

・救命救急センターの自殺未遂者対応は地域差があり、精神科への迅速なコンタクトが重要である。また、妊産褥婦や思春期世代など特異的なデータ収集や、亡くなった患者の遺族への支援も重視されている。パンフレットなどを活用した声かけや地元行政との協力が必要である。

質疑応答

・3次救急に限定されているため、重篤度の高い患者が対象となっていると思うが、今回の症例の中で、いわゆる何度も自殺を繰り返している方の割合についてはどの程度含まれているのか。

・現在のレジストリでは、再企図者を直接特定することは困難であり、過去の自殺企図歴が把握できない。ただし、若い女性に再企図が比較的多い傾向がある。将来的にマイナンバーカードの情報や統計データが連携されることで、過去の自殺企図歴を把握し、予防のための取り組みに活かせる可能性がある。最も重要なのは、次の自殺企図を防ぎ、患者に寄り添った対応を行うことであり、研修を通じてスタッフへの教育を進めている。

・救命救急では限られた時間の中で患者の命を救い、退院へとつなげていく役割があり、その際、患者が抱える背景や課題を考慮し、命を救う。その後の支援につなげることについて、臨床家としてどんな思いを持っているか。

・身体科としては、精神科医が対応するまでの間、自殺リスクの評価や寄り添い、安全な環境の提供を行い、患者をつなげる役割に注力している。ただし、ベッド不足やスタッフ状況により、患者をその日のうちに帰さざるを得ないケースもあり、その場合は紹介状や家族への受診確認を徹底している。これらの対応は地域によって違いがあることも認識している。

議題3 その他、意見交換

- ・精神科のプライマリーケアを誰がその場で提供するかは重要だが難しい課題であると認識しており、将来的な展望を持ちながら対応する方が良いと考えている。
- ・少人数の部会形式の開催を提案する案に賛同する。また、自殺対策において外国人の自殺や健康問題を重要なテーマとして捉え、課題解決に貢献したい。
- ・研究の際に国籍データを活用することが可能であり、必要があれば協力できる。また、研修の成果を広げるために、オンライン配信を工夫し、視聴者に修了証を発行する仕組みを提案したい。
- ・薬剤師として、学校薬剤師の立場で薬物乱用防止教室を行っているが、最近ではオーバードーズが話題になる。配布資料から若い女性に多い背景を知り、快楽目的だけでなく精神的に追い詰められた結果のオーバードーズもあると感じた。来年度は子どもの自殺に関する教育の実施にも取り組めればと考えている。
- ・ゲートキーパーの役割が民生委員児童委員の活動と一致していると感じたため、思春期の子どもや経済困窮家庭への支援により真剣に向き合う必要がある。来週の研修会で新たな学びを得て、活動に活かしていきたい。
- ・親族を失った方との関わりの中で生活の再建を支援したが、最終的には遺体として見つかった経験があり、職員一同その振り返りができず心の整理がつかない。相談できる場や支援体制の必要性を改めて感じている。
- ・相談者の希死念慮への対応に努めているが、制度や支援だけでは内面的な課題とのギャップを埋めることが難しい。支援の連携や相談者の気持ちの変化にどう向き合うべきか、関係者で整理し協議する場が必要だと考える。
- ・日本は若年層の自殺率が高く、死因 1 位が自殺という特殊な状況である。原因は学業ストレスや社会的プレッシャーなど多岐にわたり、身近な人でも気づけないことが課題である。社会全体で支え合い、改善策を進める必要性を感じており、この会議を通じて具体的な進展を期待している。
- ・ゲートキーパー手帳を通じて、自身の仕事が子どもの変化に気づき、声かけや傾聴をしながら支援機関につなぐ役割があることを再認識した。現在の小学生は自己肯定感が低く、ネガティブな発言が多く見られるため、自己肯定感を高める教育を進めていきたい。
- ・家庭環境が子どもの問題に深く関わることを強く実感している。そのため、学校内の対応だけでなく、子ども家庭支援センターや児童相談所との連携が不可欠である。以前、紹介された精神科に受け入れを断られる問題があり、救急対応可能な施設の情報が現場では必要と感じる。家庭の事情やプライバシーに配慮しつつ、適切な支援を進めた

い。

- ・自殺企図された方のデータ収集など新しい取り組みについて学び、大変参考になった。監督署として長時間労働や過重労働の迅速な対応を通じ、社会のセーフティネットとして自殺防止に寄与できるよう、引き続き知識を深めていきたい。

- ・自殺企図者への支援として病院でのベッドサイド相談を試みている。病院に駆けつけ、ご本人の了解を得ながらトラブルに関する相談を行う仕組みだが、まだ理解が広がらず試行錯誤している状況である。自殺の要因を軽減するため、少しでも支援につながる取り組みを続けたい。

- ・今回の協議会を通じ、希死念慮を抱える子供や、その影響を SNS などで受けてしまう若年層への対応が重要だと改めて感じた。特に、希死念慮から自殺未遂になる前に、医療や制度につながりにくい現状が課題である。ハイリスク層へのアプローチはもちろん、市民や区民に希死念慮への対応や声掛けの方法を広く知ってもらうポピュレーションアプローチの必要性を強く認識した。

- ・近年、若年層の自死が増加しており、オーバードーズの増加や精神医療に関わりながら家庭で苦しむ背景が一因とされている。また、子どもの自死後の学校調査では説明不足による不信感や、報告書が予防に十分活用されていない問題が懸念されている。学校や地域が連携し、悲劇を防ぐ仕組みづくりを求める。

- ・若い方のオーバードーズが救命救急に運ばれるケースが多いが、その背景には積極的に死を望んでいるわけではなく、生死への希薄な感覚がある場合が多いと感じた。一度救命されても、退院後に地域支援に繋がりがづらい現状があり、保健センターや地域のバックアップ体制に課題を感じる。現在は地域での支援を充実させるための取り組みを模索している。

- ・警察として自殺企図者を対応する中で、医療機関や家族への引き継ぎができない孤立無援のケースに悩むことが多く、特に緊急性が高い夜間の状況が課題である。そのような場合に、行政の窓口や北区に夜間対応が可能なセクションがあれば教えていただきたい。

- ・警察が自殺企図者を対応する際、対応後に自宅へ帰るケースもあるが、その後亡くなる事例があり最適な対応が難しい。医療機関や行政への相談や連携を強化したいので、助言や窓口があれば教えていただきたい。

- ・子どもや若者は未遂が多く、助けを求めるメッセージ性が強い一方、大人は生活苦などを原因とした既遂が多いと感じる。未遂・既遂の原因をしっかりと分析し、情報共有できる体制を作り対策を立てることが重要であり、その枠組みに協力したい。

- ・来年度の取り組みについてテーマを絞りながら具体的に対応して

いく方針に賛成である。同じ事例はなく一律の対応は難しいため、成功事例を共有し柔軟な対応につなげることが重要である。

- 全員の発言から、委員の関係各所が役割を適切に果たしながら連携することの重要性を感じた。また、副委員長の発言から、自主協力を通じた取り組みを計画づくりに反映していくのは理想であると感じた。

- 事務局から説明のあったテーマをもとに議論を進めていくこと、そして各委員がコアとなる発表の時間を持つことについて参加者の了承が得られたことを確認した。

閉 会